

本州日本海側唯一の政令市新潟市の最新まちづくり

鈴木 孝男 新潟食料農業大学

1. 新潟市の地勢と歴史的な成り立ち

新潟市はかつて、「地図にない湖」と呼ばれるほど湿田・沼田が広がっており、肩まで浸かっての田植えや舟に乗って稲刈りをしてきた。さらに、洪水に襲われる不安定な稲作を強いられていたが、大河津分水（1922年）や排水機場の整備により乾田化が進み、米の一大産地となった。

開港五港の一つでもある新潟市は、1869年（明治元年）11月19日の開港から、一昨年で開港150周年を迎えた。江戸時代には、北前船の寄港地として賑わい、一時は全国一の人口になるまでの湊町として成長した。新潟湊の後背地古町には、回船問屋が建ち並び、県庁、郵便局、銀行などが設置され、政治・経済の中心地を担っていた。

他方、市域の農村部では、信濃川や阿賀野川流域において舟運が発達したことにより、亀田、新津、白根等の在郷町（小都市集落）が形成され、都市と田園地域の強い関係が結ばれた都市構造が形成された。

2. まちなかの賑わいをつくる新潟駅周辺地区の整備

新潟駅周辺では、ビックプロジェクトが進行しており、在来線を新幹線と同じ高さにする高架化、幹線道路の立体交差化、駅前広場の整備が行われている。駅直下は、バスターミナルを設置するなど、鉄道で分断されていた南北市街地が一体化され、安全かつ円滑な交通が確保されることになる。さらに万代広場を拡張し、緑があふれ、人々が憩い、集う駅前空間として生まれ変わる（2023年度完成予定、図参照）。この広場は、新潟市8区の「水と緑のつながり」をテーマに、点在する「潟」をイメージした上屋の配置や、多様な樹木で植栽することで、美しい里山を演出したデザインになっている。雨や雪を気にせず、駅から万代・古町へ人の流れを創出しようとする意図も含まれている。駅周辺に都市機能を集積することにより、新潟市で最も求心力を発揮する地区へ発展していくことが期待されている。



図 新潟駅万代広場イメージ
（出典：新潟駅周辺整備事務所パンフレット）

3. 中心市街地の活気を取り戻す動き

新潟市の中心市街地には、古町、万代、新潟駅周辺の3つの商業エリアがある。しかし、かつての中心部古町は、歩行者通行量や商業販売額等が大幅に低下している。さらに、中核商業施設が撤退するなど厳しい状況である。こうした中、再開発事業により、市役所の一部機能を複合した商業・業務施設「古町ルフル」がオープンし、新たなランドマークとしての期待が高まっている。

高度成長期以降に開発された万代地区は、若者を引き寄せる商業施設が多く立地し、集客力を高めている。スノーピークと市の官民連携で、信濃川沿いの堤防「やすらぎ堤」を活用した「水辺のアウトドアラウンジ」は、ユニークな親水空間の事例として注目されている（写真参照）。

こうした、さまざまな変化の息吹はあるものの、郊外の大規模商業施設との競争が激しくなり、中心市街地の賑わい創出には多くの課題を抱えている。

4. 田園と都市が共生する都市・地域づくり

新潟市にとって、全国有数の食産業を支える農村集落の人口維持と農業や食品企業の人材確保は重要である。そこで2014年から、農村集落を対象に住宅等の建築許可を緩和する「田園集落づくり制度」が導入され、人口減少の抑制に一定の効果が発揮している。さらに、農産物直売所や農家レストランによる交流・観光を促進するとともに、自然・農業体験などを通じて農村の魅力を都市部と享受することと、地域への誇りと愛着を醸成しようとしている。

新潟市は、2005年の14市町村の合併を経て、2007年4月より、日本海側で唯一の政令指定都市となった。この合併は、「都市と田園の結婚」と言われ、現在検討中の第二期都市マスタープラン策定においても、「都市と田園が共生」は方針の一つになっている。新潟市の都市・地域づくりは、地勢と歴史的な成り立ちに基づき、中心市街地と農村集落の維持・活性化を一体で進めていくことが大事である。



写真 やすらぎ堤「水辺のアウトドアラウンジ」の様子